
レイニーブルー

弓月 渡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レイニーブルー

【Nコード】

N4670F

【作者名】

弓月 渡

【あらすじ】

交通事故で視力を無くしたロックバンドのボーカル、拓海。あの事故の日から彼の目に焼きついた雨はやまない。視力を失い絶望の彼は一人の女性と出会う。目の見えない彼の手を引いた彼女に拓海は戸惑いつつ、興味を覚える。彼女の名前は真由。生まれつきの難聴を抱えた孤独な小説家だった。目の見えない青年と耳の聞こえない女性の、不器用でたどたどしい、そんな雨のLove Story。

R a i n y B l u e 〵 雨の日の憂鬱 〵 (前書き)

ちよつと暗い始まりになります。読んでもらえれば幸いです。

Rainy Blue 雨の日の憂鬱

—あの日から…雨がやまない。

彼の口が、そう動いた。

意味を分かりかねて問い返しても、彼は寂しげに遠くを見つめるだけ。

何も映さない彼の瞳は何を見つめているのかしら。

私にも同じものが見れたらいいのに……。

それは寒い冬の夜のこと。

一台のバイクが車と事故を起こした。

ぶつかった衝撃で投げ飛ばされ、地面に叩きつけられた彼が見たのは冷たい千の雨。

暗い夜空に赤いテールランプが滲み、雨はアスファルトを打つ。

それが彼が見た最後の光景。

最後の光——。

あの日、雨は彼から光を奪った。

そして…あの日から彼は暗闇に閉ざされ、彼の瞼には滲んだ雨が降り続けている。

そう、絶望という名の涙雨が……。

けして止まない雨。

永遠に彼の心から消えない残像。

それは彼を苦しめ、彼の全てを変えた業。

でも、それすらも羨ましいと思ってしまうなんて。
私は…嫌な女だわ。
恨まれても、憎まれても、彼の瞼に残れるなら―。
冷たい雨にさえ、そっと添っていたい。

窓の外は雨―。

彼はたった一人で悲しい雨音を聞いているのかしら。
こんな日は私も薄暗い部屋で一人、壁にもたれてそっと彼を感じる。
る。

空虚な部屋。

永遠に続く無音の世界に響く、痛々しい鼓動。
壁越しに伝わる彼の痛み。
彼の絶望を肌で感じ、私は一人涙する。
きつと一人で泣けない彼のために。

雨は、私を憂鬱にさせる。

雨は、私に彼のことを教えてくれる。

雨は、私の悲しい物語にほんの少しの優しさを注ぐ。

そして…雨は苦みに似た幸せをくれる。

…やっぱり、私は嫌な女だ。
悲しい雨が優しいなんて―。
この憂鬱すらも愛しいなんて―。

やまない雨

―何で俺だけ。

上原拓海は怒りに任せて病室のベッドに拳を叩き込んだ。
白い無機質なベッドが悲鳴に似た軋みをあげ、拓海の手に痛みが走る。

「くそっ！」

だが拓海は殴るのをやめなかった。
何度となくベッドを殴りつける。

手が熱い。

痛みが鼓動を打つように広がる。
でも拓海は拳を止めなかった。
それが―、今の彼に出来る唯一の慰めだったから。

拓海はインディーズであるが、それなりに注目を浴びているロックバンドのボーカルをしていた。

ファンも多く、去年出したアルバムも好評で、メジャーデビューの話も来ていた。

全てにおいて充実していた。

順風満帆で、拓海には怖いものなど何もなかった。

そう―、拓海のこれからは輝くばかりで前途洋々だった。

あの日までは。

あの冬の日、冷たい雨が降る夜に一台のバイクが横転した。
交差点で乗用車との出会い頭。

スピードを出してバイクを走らせていた拓海の体は車にぶつかった瞬間、暗い夜空に舞った。

セピア色の切り取られた風景が壊れたスライドショーのようにゆっくりと移り変わってゆく。

雨で滲んだライト。

ライトに照らされた千の雨。

拓海が途切れゆく意識で最後に見たのは雨の情景だった。

そう、痛々しく冷たい雨の――。

涙の色をした悲しい雫が、地面に倒れ暗い夜空を見上げる拓海の頬を絶え間なく叩いていた。

激しく地面に叩きつけられた拓海は命の境界をさ迷う重体だった。
1週間拓海は昏睡状態だったが、目覚めれば驚く早さで回復していき、あの大事故で運がよかったと、すぐに元通りになると医者は言った。

あれだけの事故にしては奇跡的だと、下半身不随になっていたかもしれないのに、骨折ですんでよかったと拓海を慰めた。

でもどんな言葉も拓海にはただの気休めにすぎなかった。

あの事故は拓海から大切な物を奪ってしまったから。
けして元には戻らないもの。

それは光。

事故で頭を打った拓海は打ち所が悪く、視力を失ってしまったのだ。

ずっと自分の前にあった道が突如崩れ落ち、拓海を前も後ろも分らない暗闇に突き落とした。

今まで確かだと思っていたものが足元からガラガラと音を立てて崩れていく。

絶望が拓海の心を蝕む。

「くそっ！くそっ！！」

拓海はベッドを殴り続ける。

あの日の雨の残りだろうか。

光を失った瞳から一筋の涙が流れた。

それをきっかけに拓海の口から嗚咽がこぼれる。

後悔と憤りと、そしてどれだけ悔やんでも何も変わらない現実の空しさと……。

喉を震わし、何かを絶えるように拓海は嘆いた。

瞼に浮かぶのはあの日の雨。

永遠に降り続く冷たい雫。

でも、光を失った彼の瞳から流れ出たのは始めの一滴だけ。
いつそ全て流れ出てしまえば、この光景を忘れることができるの
に。

拓海の心に雨は降り続く。

絶望に似た雨が……。

「なんで俺なんだよ……。」

嗚咽と共にどうにもならない言葉を絞り出す。

拓海は光のない世界で心さえも暗闇に染まる恐怖を感じ、全てを失った自分に嫌悪した。

そしてそれ以上に自分をこんな風に追い込んだ全てに、拓海は殺意にも似た怒りを抱えていた。

どうにもならない現実。

絶望に飲み込まれた拓海は何もない病室で一人、あの雨の夜から逃げられずにいる。

外は徐々に暖かくなりつつある。

しかし早春の日差しも淡い春の風も、今の拓海には届かなかった。

最後に見たあの雨の光景。

あの日から冷たい雨がやまない。

拓海は絶望の雨の中で立ち尽くしたまま。

未だに雨の中をさ迷い続ける。

なくしたものが多すぎて――…。

日常から非日常へ

拓海が退院できたのは春の日差しが日増しに強くなる3月の半ばだった。

拓海が事故に遭った時、事故を聞きつけたバンドの仲間や友達は拓海を心配しすぐに駆けつけた。

しかし拓海はその優しさを拒否した。

その存在さえ拒絶したのだ。

理由は簡単。

今まで通りにできないからー。

当たり前のことを当たり前にする仲間の側で拓海は自分の現実を直面から知らしめされた。

それは拓海には受け入れがたい現実だった。

降り続く雨は拓海を疑心暗鬼に追い込み、また弱々しい自分を見られたくないという強固な執念を持たせた。

だから退院の日迎えにきたのは姉の沙弥香だけ。

慣れるまで実家に帰りなさいよ、という沙弥香の言葉を無視して

拓海は一人暮らしをしていたマンションに行くよう、タクシーの運転手に言った。

拓海に沙弥香の表情は分からない。

呆れた表情をしているのだろうか。

その遠慮がちな優しさがまた拓海を苛立たせる。

無言でいられるより、なんでもいい。

感情を荒げて文句を言ってほしい。

一人暮らしのマンションに帰っても一人じゃ何もできないのは分かってる。

でも素直に実家に帰って世話を焼かれるのは拓海のプライドが許さなかった。

自分で何もできないと分かっているにも認めたくなかったのだ。

自分が、ちつぽけな存在だということを。

重たい沈黙のタクシーの中で沙弥香がポツリと言った。

「あんた、いつまでもそれじゃいられないわよ。」

—分かってるよ！

拓海は口から出そうになった激昂を寸でのとこで飲み込むと、自分の横のボストンバックに拳をめり込ました。

バックミラー越しにタクシー運転手が嫌そうな顔をしたが、拓海には分からない。

横目でバックミラーを見ていた沙弥香はそつと窓の外に目を逸らす。

灰色の空は今にも雨を降らせそうなほど曇っている。

その空に見栄っ張りで自信家な、今までさしたる苦勞もなかった弟を重ねた。

—これから前途多難ね。

—もう二度と拓海の顔に笑顔が戻ることはないのかしら……。――

沙弥香は拓海に気付かれないように傷を負った弟を哀れんだ。

それから毎日、拓海のアパートには沙弥香と母親の陽子が来て、

面倒を見るといふ日が続いた。

来るのは家族だけ。

バンド仲間達が見舞いに来ようとしても拓海は頑として受け入れなかった。

仲間が嫌いなわけじゃない。

むしろ今まで苦楽を共にしてきた仲間に逢いたい。

でも…。

仲間の声を聞くと輝かしいあの日々が拓海の頭に蘇る。

それが鮮やかであればあるほど今の自分がやるせなく思えて…。それにまだ頭のどこかで夢であればよいという淡い期待が残っている。

目が覚めればただの夢だったと―。

ただこの夢は仲間に会えば、夢となって消えてしまっただろう。仲間と対面して、あの日々を思い出に変えてしまっただら…。

―つまらない幻想だ。

しかし分かっているでもそう思ってしまう。

有難いことを奇跡と呼ぶのだとまざまざと見せ付けられてもまだ奇跡に、有りもしない夢に縋り付いてしまう。

―かなり重傷だな。

たった一人の部屋で拓海は悲しげに笑う。

まるで泣いているかのような顔で。

でも泣けない。

泣きたくてももう一滴も涙は出ない。
代わりに瞼の裏では冷たい雨が降る。

けしてやまない雨が――。

――神さまってヤツはイジワルだ。

拓海はマンションの近くの小さな公園のベンチに腰掛け、自嘲気味に思った。

温かな日差しが拓海の頬にかかり、春の息吹を感じる。

――これじゃバンドも続けられない。こんな俺からバンドを取ったら何が残るんだよ。

手探りでシャツの胸ポケットからタバコとライターを出す。

慎重に取り出したタバコに火を付けると深く吸い込んだ。

肺に入れて初めて、キャメルであると分かる。

ここまでくるのに苦労した。

目が見えなくて一番に困ったのがタバコに火を付ける作業だ。

家にいてすることは大体、沙弥香が母親がしてくれる。

しかしタバコだけは吸いたいと拓海が言っても体によくないと聞き入れられなかったのだ。

だからこっそり吸う練習をした。

どこまでライターを近付けたら熱いのかは勉強済みだ。

紫煙を春の風に乗せながら、拓海は病院に行くために沙弥香が車を持ってくるのを待っていた。

拓海にとって久々の外だった。

暖かな日差しに少し肌寒い風が気持ちよい――。

気が付けばいつの間にか季節は拓海を置いて春になっていた。

穏やかな春の気候が荒んだ拓海の心を静め、そして切なくさせる。拓海は暗い感情を消すように深くタバコを吸うとタバコの灰を携帯灰皿に押し込んだ。

—こんなの持ち歩いてるなんてかつこわりい。

そう思うが仕方ない。

どこに灰皿があるか分からない今の拓海には必需品である。

火がちゃんと消えているかも分からないのにポイ捨てなどできないと想着て沙弥香に買ってきてもらったのだ。

初めからポイ捨てを選択肢に入れてんじゃないわよ、と悪態を吐きながらそれでも沙弥香は素早く買ってきてくれた。

これでこそ我が姉だと拓海は心の中で変わらない沙弥香に感謝した。

遠慮して奥歯に物が挟まった言い方をされる方がつらい。

拓海は携帯灰皿をポケットにしまうと大きく伸びをした。

そしておもむろに立ち上がると側に置いていた松葉杖を手探りで持ち上げる。

それを右脇に挟み、公園の出口に向かってゆっくりと歩き出した。

拓海にとってはなんとなくの思い付きだった。

いくら目が見えないからと言っていい歳して姉のお迎えを待っているのは癪に触る。

視覚障害者が杖について道を歩く光景は決して希有なものじゃない。

ならオレにもできるはずだと拓海は松葉杖を杖代わりにして歩く。道はガタガタの土で、慎重に歩かないと何に引っかかるか分からない。

初めて一人で一步を歩んだ拓海は初めて目が見えないという現実

の恐怖を感じた。

——くっ、負けるかよ。

恐怖を打ち消すように拓海は一步、また一步と足を進めた。
そんな時——。

松葉杖が何かに引っかかった。

「うわっ！」

拓海の体がバランスを崩した。

拓海は見えない目をぎゅっと瞑って、これから来るであろう衝撃に備える。

暗い瞼の奥ではあの日の雨が降り続ける。

出会いは一瞬

「うわっ！」

松葉杖を引つ掛け、バランスを崩した拓海は前のめりに倒れる。
何があるか分らない暗闇に、拓海は恐怖を覚えたが、倒れ行く体を止めることはできない。

「くっそ！」

こんな時でも瞼の奥に音もなく降り続ける雨。

—もう見たくないんだよ！

来るであろう衝撃に、痛みに、拓海は身構えるように体を縮こまらせた。

ぶつかる！！

そう思った拓海の体がぶつかったのは思っていたよりも温かな感触だった。

土というよりも人の柔らかな感触—。

拓海は驚いたように体を反らして持ちこたえるようにバランスを取った。

「な、なんだ？」

しっかりと地面に立った拓海は動揺しながら、自分を助けてくれたであろう人物に声をかけた。

拓海は沙弥香であろうと思っていた。
危ないじゃない、という甲高い声で怒ってくるであろうと…。
しかし想像は外れて何の返答もない。

「姉貴じゃ、ないのか？誰なんだ？俺は目が見えないんだよ！からかってんじゃねえよ！」

拓海は苛立たしさを隠せず、声を荒げた。

歩くこともままならない今の自分。
可哀想と同情される今の自分。

拓海は受け入れられなかった。
当たり前前が当たり前前にはできない自分を惨めに思い、それを感じさせる全てに怒り、目の前にいる、自分を哀れんでいる人物にそれをぶつける。

「同情してんじゃねえよ！ちょっと手助けしたぐらいで満足すんなよ！早くどっか行け！！」

自分で最低だと思う。

助けた人物は多分拓海が目が見えていないことを知らなかったのだから。

ヨチヨチ歩いてくる松葉杖の男が歩きなれずにこけただけで、思わず側にいて助けてしまったのだろう。

それでも拓海はその優しさを受け入れるほどの心の余裕を持っていなかった。

「早く行け！見てんじゃねえぞ！」

何の返答もない。

小さく土をするような音が聞こえた。

驚いて立ち去ったのだろうか。

拓海は泣きたいのを我慢して顔を歪め、自分から去っていくであろう人物を睨んだ。

こうやって人は去っていくのだろう。

こうやってどうしようもない悪意は受け、一人、また一人と人は拓海の側を去っていく。

悲しい現実―。

でも拓海にはどうすることもできなかった。

「ははっ。」

乾いた笑いが零れる。

「傑作だな。」

一人のちっぽけな男が調子に乗って、全て手にしたと錯覚して、でも所詮幻想で、全て夢であると気付いただけだ。拓海は気持ちを抑えるように俯き被りを振った。

「ははっ…。所詮一人だったんだ。」

拓海の側にはもう、その人物はいないだろう。かみ締めていた拓海の口から嗚咽が零れる。

―いなくなってくれてよかった。

こんな姿誰にも見せたくない。

でも欲を言えば、自分を罵倒して去ってくれればよかった。
助けてやったのにと、大声でなじってほしかった。
何も言われないほうが今はもっと惨めだ。

拓海は右手の拳でぐつと目元を拭うと大きく深呼吸をした。
こんな情けない顔を沙弥香に見られたくない。

拓海は俯きながら、またゆっくりと歩き出そうとした。
俯いて地面が見えるわけない。

それでもそうしてしまうのは目が見えていた時の幻想があるから
|。

足元を注意して歩きなさいと言われて育ってきた。

―癖って怖いな。

拓海は苦笑しつつ、一步を踏み出した。

ふわりっ―。

何かが拓海の左手に触れた。

ギブスをした手を気遣うように優しく―。

「えっ？」

それは温かな手。

拓海を支えるように、導くように添えられている。
けして出過ぎることなく、拓海の歩に合わせて添えられる。

「なんだ？」

訳が分らずに自分の左を見やるが、その人物は何も言わない。

ただ優しく先を促すだけ―。

さっきの人物だろうか。

まだ側にいたのだろうかと拓海は動揺を隠せない。

しかし思わぬ行動にさっきのように手を払うタイミングを逸してしまった。

なんだか分らずにその人物の手を借り、拓海はゆっくりと歩いていった。

春の暖かな日差しと冷たい風を肌で感じ、柔らかな手の優しさを心を感じた。

拓海は自分の泣き顔を見られたという負い目から恥ずかしそうに顔を逸らし、不貞腐れたように歩く。

相手は何も言わない。

しかし、微かに聞こえる息使いとそつと添えられる手から相手の必死さを感じた。

緊張しているのか少し手が震えている。

拓海は拍子抜けした。

さっきまでの激情はなんだったのか―。

あんなに激しく罵倒されてもまだ、助けようとするなんてどこまでお人好しな奴なのかと拓海は呆れてしまった。

狭い公園だ。

すぐに足が踏みしめる感触が土からアスファルトに変わった。

謎の人物の手が拓海の袖を引く。

そして松葉杖をついていた右手をそつと持つと公園の入り口に立っているポールに持っていく。

―ここが出入り口だと教えてくれているのだろうか。

拓海はされるままにポールに手をつく。

―何故、この人物は何もしゃべらないのだろう。

拓海が不審な顔をしたからだろうか。

その人物の手がポールに置かれた拓海の手に置かれる。

柔らかで、小さな手。

相手は多分女だろう。

何も分らない拓海は唯一の情報源に意識を集中させる。

手はそつと離れると、拓海の手の手甲に指を添わせる。

むず痒い感覚を拓海の手甲に与えながら、その指は何かをなぞるように動く。

『コマデコウエン。ココデイ？』

多分そう書いているのだろう。

ゆっくり何度も書く手は、拓海の意味を問うように時々重ねられる。

拓海はその人物に合わせるように大きく頷いた。

『ヨカッタ。ゴメンナサイ。』

―何に対して謝っているんだ？

拓海は相手の意味を分りかねた。

『モウ、ダイジョウブ。』

相手はそう書くと、拓海の手を力強く握った。

―慰めてくれてるのか？

拓海は驚きと共に体を引いた。

じやりつと土を踏む音がし、その人物の去っていく足音がする。

拓海は焦って、松葉杖をついていた右手を伸ばす。
弾みで松葉杖が地面に落ち、カランと音をたてた。

「おい！待てよ！！何で…。」

何で俺を助けたんだ？その言葉を拓海は飲み込んだ。

何の返事もない。

松葉杖もそのまま―。

拓海はただそこに立ち尽くしていた。

『ダイジョウブ』

その言葉が拓海の胸に広がった。

暗い暗い雨の中―。

一瞬光を見た気がした。

ダイジョウブ

『ダイジョウブ』

書かれた言葉を心で反芻してみる。

気休めだと、同情だと突っぱねてきた言葉―。

何故、謎の人物の言葉がこんなにも気になるのか。

相手が消えた方向を見えもしないのに、諦め悪く見つめる。

だが拓海の視線に相手が気付くことはなく、ただ一人そこに取り残される。

「ちょっと！あんたここまで歩いてきたわけ！」

謎の人物がいなくなつてしばらく経つた時、拓海の耳朵に聞き慣れた沙弥香の声が聞こえた。

拓海は億劫そうに後ろを振り向く。

沙弥香は拓海がここまで歩いてきたという事実には驚きを隠せず、目を丸くして拓海見つめた。

「すごいじゃない！」

「ああ。そんなことより俺の周りに誰か人、いなかった？」

「そんなことって…あんたにとっては大きな一歩でしょ！」

「いたのか？いなかったのか？」

拓海は苛立たしげに声を荒げる。

せつかく弟の第一歩を喜んでいるのに、何故不機嫌そうにされないといけないのか。

沙弥香は不服そうに眉を寄せたが、拓海の質問に答えた。

「人って…私が来た時あんたの周りには誰もいなかったわよ。」

―いなくなつた後だったか。まだ…側にいてると思つたんだが。

自分の欲しい答えが貰えず、拓海は落胆した。

自分でも何故あの手を引いてくれた人物が気になるのか分からない。

『ダイジョウブ』

その一言が拓海の心突き動かす。

「でも、女の子と一人、その角ですれ違ったわよ。」

―そいつだ！

「どんな子？」

「ええっ？そんなのはつきり見てないわよ。髪の毛長い、大人しそうな子よ。」

「いくつぐらい？かわいい？」

拓海は身を乗り出した。

沙弥香は驚いて身を引く。

「だから、ちゃんと見てないって！」

「役立たず。」

拓海はため息をもらした。

「あらっ！ずいぶん言いぐさね！お姉ちゃん久々に力チンときちやった！」

しかし拓海はその言葉に答えず、そつと重ねられた手の温かさを感じ出した。

所詮、出会いとは一期一会か。

通りすがりだから、純粹に優しくできる。

拓海はそう皮肉げに笑った。

それからの日々は変わり映えなく過ぎ去った。

家にくるのは姉と母だけ。

拓海はやることもなく、ただぼあつと日長一日を過ごした。

しかし、元来じつとしていられない性質の拓海。

無機質な空間に居続けることが苦痛で、そこから逃げ出すようにあの公園に行った。

始めは赤ん坊並みにゆっくりだった歩行も慣れてしまえばこつちのもの。

何度も通ううちにマンションの階段の数も覚え、公園までの歩数も分るようになった。

いつの間にか定位置になった木製のベンチに腰掛け、見えない空を仰ぐ。

暖かい日差しを肌で感じ、風の音を耳で感じた。

—じじいみてえだな。

そつと胸ポケットから煙草を出し、慎重に火をつける。
僅かに爆ぜる音で火がついたことを確認すると深く紫煙を吸い込んだ。

苦い煙が胸に染み、心が落ち着く。

—このまま行けばボケちまうぞ。

はつと息を吐き、自嘲気味に笑う。

—俺は一体どうなるのだろう。

最近ふと、思い浮かぶ疑問。

ただ答えを捜すのが怖い。

今までそんなコト考えたこともなかった。

何か不測の事態が起こっても結局なんとなかってきた。

先を恐れ、動けない自分など想像もしていなかった。

「カッコわり。」

紫煙と共に吐き出した言葉は拓海には見えない深い青空に吸い込まれた。

立ち上がった拓海は、自宅マンションとは反対に歩き出した。

—もう、どうでもいいや。

諦めよりは、開き直ったように拓海は思い付く方に足を向けた。

「いつも家と公園の往復ってガキかよ。何が怖いんだ？人か？車か？」

自分を皮肉る。

「失うものなんて俺にはないんだ。今更事故の一つや二つ。死んだって、今と何も変わらない。ただ淡々と、この苦痛を抱えていかなければ生きていけないんだ。」

暗闇に足を出す。

ズボンが何かに引っかかる。

公園の植木だろうか。

「怖い…。」

でも足が止まらない。

何か堅いものにぶつかり、引っかかり、土に勢いよく転がる。

「いつてえ！」

ギブスで固められた全身に痺れるような痛みが走る。

「は…はあ。」

何をしたいのか分からない。

でも胸を突いて出る衝動は止まらない。

拓海は懸命に抗った。

それが運命なのか、何なのか…。

見えない暗闇の中、瞼に映る雨の光景。
拓海は雨の中で必死に叫び声をあげた。

優しい雨

拓海は訳の分からぬままに歩いた。
土を踏む音がいつの間にかアスファルトの堅い感触になる。

—このまま…誰もいないところに…。

拓海はそのままアスファルトを突き進んだ。

この時、自分が車道を歩いているなど知らずに。
はっと気がついた時には、ごおっという風を切る音をたて車が近づいてきていた。

車道の真ん中で立ち止まった拓海に向かって、シルバーのセダンが走ってくる。

拓海に気付いた運転手が慌ててブレーキを踏んだ。

—ヤバいつ！

引き返そうにも車がどこから来ているのか、どこまで戻ればいいのか、拓海は足が竦んで動けない。

—これはマジで死ぬかも…。

胸の内が一気に凍てつき、血が引いていく。

—やっぱり俺は一人じゃ何もできないのか。やっぱりオレには何も無い…。

拓海は暗い夜空に無数の絶望が降り注ぐのを見た。
冷たい雨が音もなく、拓海の肌を叩く。

— やっぱり… 雨がやまない。

後僅か、車はスピードを押さえきれずに拓海に迫ってくる。
ギュルルル—。

キキッ—！！！！！！！！

タイヤが空回りし、アスファルトと激しく擦れる。

— ここで… 終わりか。

拓海は悲しげに口を歪ませた。

— これで雨が上がるな。永遠に…。

悲観げに覚悟を決めたた拓海。
空気を引き裂くブレーキ音。

— これで…。

見えない目をぎゅっとつぶる。

押し寄せる車の衝撃が拓海の肌にびりりと響く。
車道に立ち尽くした拓海は全てを覚悟した。

しかし、何かが拓海の腕を掴んだ。

— えっ？

驚く拓海に構わず、その人間は懸命に拓海の腕を後ろに引いた。

— 何？

何かが強く拓海の腕を握っている。

―あつたかい。

拓海は呆然としたまま、されるがまま。
ふらつくように引かれた方に倒れこむ。

キキッ！

タイヤの音がやんだ。

車は拓海のいた場所から目と鼻の先でようやくと動きを止めた。
た。

車の中の運転手が心底安心したように、背もたれに頭をあずけた。

「バカやろう！！なにしてるんだ！」

運転手の激しい罵声が響く。

しかし拓海は言葉が出ない。

車に引かれる恐怖に増して、死を覚悟した自分が無事だという事
実に驚きが隠せない。

―なんで…。

車のエンジンがかかり、運転手が腹立たしげに走り去る。

「はあっ、はあっ。」

拓海の横で小さく息の弾む音がする。
小さな、女性の吐息。

「うつ、うつ。」

安心感からか、吐息は嗚咽に変わる。

―なんで泣いてるんだ？

ぎゅっと握られた腕にぽたりと何かが落ちた。

―雨？

それは温かい雨。

「うつ。うつ。」

冷たい雨の中、一滴の涙が拓海に触れた。

それは早春の日差しのように柔らかくて、優しい。

キツカケ

—なんで…。

ぼたりぼたりと温かい滴が肌を打ち、拓海の中に染み込んでいく。

どさっ—。

ほっとして、拍子抜けして拓海はその場にへタレ込んだ。

「…くっ—。」

喉の奥から衝動が付いて出る。

「くう〜…うつ、うつ。」

人目も気にせず、思うままに拓海は嗚咽を漏らした。
手先が奮え、うまく感情がつかめない。

でも拓海に分ること。

それは……。

—生きてる。

「…生きて、る。よかつ…。」

拓海は嗚咽と共に安堵の言葉がこぼれる。

見えないはずの目の前に自分の両手を広げてみる。

「よかつ…ホントに生きて…。」

— かつこわり。

自分の思い上がった行為に今更ながら腹が立つ。

自暴自棄になって、でも死に切れず生きていることにこんなに安堵している自分が無性に情けなくなる。

涙を忘れた瞳から、そつと一滴の雨粒が流れ出た。

優しく拓海の頬を伝い、地面を弾く。

後はただ瞼に残りの雨が降り続くだけ。

それでも確に残る涙の跡に感情が高ぶる。

拓海の嗚咽に重なるように、微かな女性の泣き声が聞こえた。

そしてその声は座り込んだ拓海を包み込むように温かく被さる。

— あったかい。

公園の前の歩道で、二人はうずくまったまま。

肩を震わす拓海を優しく包み込み、彼女は涙を流して泣いていた。その温かな雫が拓海の心に落ちてくる。

そつと沁みこむように消えていく涙は拓海の知っているものとは違って、優しい。

思わず自分が泣いているのかと拓海は錯覚した。

— 俺、泣きたいのかな。

あの日の雨はやまない。

けど、何かが変わった気がした。

不確かで、形もない。でも— 確実に。

雨の中に一滴の涙が加わったから。

想像もしていなかった未来を見せ付けられ、栄光の真っ只中にい

た過去の拓海は絶望した。

全てを失い、そして自分を包む暗闇から、その全てから解放されたいと望んだ。

―解放された訳じゃない。けど…。

何かが変わる。

そんな予感がした。

とても弱々しくて、脆いきっかけ。

でも、あの雨の中から、拓海は今一歩踏み出した。

迷いながら、大きな不安を抱えながら、訳も分からずに雨の中を走り出そうとした。

アリガトウ

いつまで二人でそうしていただろう。

拓海が顔を上げると、それに合わせて覆い被っていた女性も離れる。

ずっと触れていた柔らかな髪が拓海の頬をそつと撫でる。

甘い香りが遠くに行った。

はたと気がつき、拓海は恥ずかしそうに顔を背ける。

相手はそつぽを向く拓海の手に自分の手を重ねた。

温かい手。

その手は拓海の手をぎゅっと握り締める。

「なんなんだよ！あんたは！言いたいことあるなら言えよ！！」

相手がいるであろう方を見て、噛みつくように叫んだ。

相手はまた何も言わない。

沈黙が続く。

拓海はその沈黙に耐えられず、声を荒げた。

目が見えない分、音にして情報を伝えてもらわなければ不安で仕方ない。

「俺は！目が見えないの！だんまり決め込んでんじゃねえ！」

「…。」

「バカにしてんじゃねえぞ！」

握られた手にぎゅっと力を加わった。

「……。」

―責めたいんじゃない。何か一言でも返してくれれば、素直になれるのに。

恥ずかしい姿ばかり見せて、訳も分からず噛みついて、今更簡単に話しかけるなど拓海には出来なかった。

―なんなんだよ、こいつ。

拓海は怒りより戸惑いの感情が強くなるのを感じた。

―幻想とかじゃないよな。

ただ重ねられた手の温かさだけは確かだった。

「……まっ、助けてくれて、かなり助かったけど……。」

恥ずかしさに語尾を濁し、顔を背ける。

―こっこの柄じゃねえんだよ。

重ねられた手が急に離れたと思うと、拓海の手の手甲に指が触れた。

『ゴメンナサイ。』

―なんだ？

拓海はその言葉に拍子抜けした。

―何に対して謝ってるんだ？俺、さっき礼言ったよな。

いつも通りと調子の違う相手に、拓海は知らず知らず心を開き始めていた。

目が見えないことへの負い目も今はどこかへいつてしまっていた。

「いや、だから…助かったんだよ、俺が。見えないから、どうやって車よければいいかもわからねえし…。あんたのおかげだよ。」

「…。」

「これで2度目だな。ほんと、ありがとう。」

「…！」

拓海の側にいる人物は驚いたようにびくりとなる。

『アリガトウ。』

優しく拓海の手の手甲に指が触れる。

その言葉はじわりと拓海の胸に染み込んだ。

「なんで…礼を言うのは俺の方…。」

『モットハヤク、トメレレバヨカッタ。アナタニクルマガチカツイテイルツテ。ダカラ、ゴメンナサイ。』

相手は拓海の見えないことを知っているのだろうか。

拓海は驚いたように相手に手を伸ばす。
闇雲に掴んだ細い腕を力強く握る。

「知ってるのか？」

呟くように聞く。

だが、相手は拓海の質問には答えなかった。
一生懸命に拓海の手の手甲に刻んだのは別の言葉だった。

『…スコシ、ココデマツテ。ヨンデクル。』

「えっ誰を？」

思いもしない言葉に驚いた拓海。

しかし、ジャリッと砂を踏む音と小走りに離れてゆく足音が聞こえるだけで返答はなかった。

たった一人、歩道のアスファルトの上に取り残される拓海。

優しいのは彼女だけじゃなく、春の穏やかな風も拓海の心にゆったりと吹き、落ち着きを取り戻させてくれる。

「何なんだよ。訳わかんね。ってかなんで筆談？目が見えないの分かってるのに一番難しいコミュニケーション方法取りやがって。」

何だか分からないが、笑えてきた。

ただ単純に、素直に笑えた。

何故だろう。

あの日から初めて拓海は心から笑った気がした。

一瞬の光

「あんだ！何やってんのよ！！」

座り込んだ拓海の頭上から沙弥香のかん高い声が降り注ぐ。

「あ、姉貴！？」

拓海は驚いたように顔を上げた。

そんな拓海を沙弥香はするどく睨みつける。
きりりとした美人顔がさらに鋭さを増す。

「なんでここに…。」

「そんなことより、あんだ、何勝手に出歩いてんのよ！人がどれだけ心配したか！」

「わ、悪かったよ。」

素直に謝る拓海に沙弥香は驚いたように目を見開いた。

頑固で、意固地で、プライドばかり高い拓海。

特にあの事故から、自分の殻に籠もってしまっている拓海は卑屈になるばかりで、簡単に礼など言わない。

「で、なんでこんなところにいんのよ？」

「…ちよつと、ね。」

拓海は言葉を濁す。

流石に車に引かれそうになったとは言えない。

そんな拓海を沙弥香は怪訝な顔で見つめたが、それ以上は何も言わなかった。

拓海の腕を掴むと立つように促す。

「まったく、こんなとこ座り込んで。服は砂だらけだし。子どもの時と何一つ変わらないじゃない。」

ぶつくさ言いながら、拓海の服についた砂を沙弥香は払ってやった。

しかしその行為がお気に召さなかったのか、拓海は邪険にその手を払いのける。

むすっと眉を寄せ、子どもの時のようにそっぽを向く。

「ほつとけよ！それより……。」

「ほつとけないわよ！あの子が教えてくれなかったら今頃もっと別の場所まで捜しに行ってたじゃない。」

「あの子？」

不満げに言う沙弥香に拓海は食い尽いた。

勢いよく肩を掴まれ、沙弥香は驚いたように一步身を引いた。

「あれ、誰なんだよ！」

「誰って、あんた……。あつ、そういえばそんなことより怜司くん来てるわよ！だから、公園に呼びに行ったら、あんたいないし！」

はたと自分が公園に赴いた目的を沙弥香は思い出した。

拓海の部屋に來た來客。

それは拓海のバンドのメンバーで高校からの友人。

拓海の無二の親友が來てくれたのだ。

もしかしたら拓海が回復する兆しになるかもしれない。

そう期待した沙弥香は居ても立ってもいられず、拓海を捜しに出たのだ。

沙弥香の言葉に今までの勢いを失い、拓海はうろたえたように言葉を上擦らせた。

「怜司…來てるの？」

「そつよ！早くしなさい！」

ぐいつと拓海の手を引き、沙弥香はマンションに向かってずんずん歩きだした。

「おつ、おい。待てよ！」

「今まで散々待つてたのよ！さあ早く！！」

沙弥香は聞く耳を持たない。

公園の歩道から公園の入り口に向かう。

その途中、公園の入り口の側でおどおどと二人の様子を窺がっていた女性に沙弥香は気付くと笑顔を浮かべた。

勢いよく彼女に頭を下げる。

「あつ、ありがとうね。うちのバカな弟見つけてくれて！」

髪の長い、華奢なその女性は沙弥香の言葉に恐縮するように手を振って答える。

切なげな瞳をそつと細めて笑い返す。

「えっ……。」

沙弥香の言葉に拓海は見えないのを忘れ、視線を漂わせるように首を回した。

が、何かが分る訳はない。

「さっ、早く行くわよ！」

拓海はそのまま引きずられるようにその人物から離れていった。その背を彼女はずっと見つめていた。何かを祈るようにつつと。その髪を春の風がそつと揺らす。

春の麗らかな日差しの中で、二人は確かに出会った。淡い桜の花が雨のように降り注ぐ。

あの日から拓海の中の雨はやまない。でも暗い雨空に、一瞬の光が差した。暗闇に足を取られ、もがき続ける拓海の胸に確かにそれは届いた。

Rainy Blue 雨模様

それは雨に似ているー。

私の胸をときめかせて、心を揺らす。

“音”、それは私と無縁のものだった。

私の世界は常に無音で、切り取られた風景の世界。

そんな私には、音が楽しいなんて書く『音楽』など想像もつかなかった。

光のように日常に溢れている音。

繭に包まれた私の元には届かない奇跡。

『天使の歌声』

そう書かれたコンサートのポスターに私の心は惹かれた。

音は、音楽はなんて素晴らしいものなのかしら。

天上の世界にも匹敵する歌はどんなものなのかしら……。

一度でいい。音楽を感じてみたい。

音楽で感動して泣いてみたい。

それが私の密かな夢。

雨の日、外に出てみる。

ポツポツと雨粒が私の頬を叩く。

肌を打つ雨はまるでリズムを叩くように降り注ぐ。

雨が好き―。

雨は私の目に、肌に、音を教えてくれる。

雨の日は決まって、窓際で音を感じる。

雨がアスファルトを打つ感覚が地面を通して私に伝わってくる。
ベランダに置いた植木の葉を雫が伝い、揺れる。

その全てが無音の音楽。

それで私はほんの少し幸せになれるの。

だから―。

それはとても雨に似ていると思った。

壁から響く振動。

始めは何か分からなかった。

それが音楽を奏でているのだと気付いたのはしばらくしてから。

偶然、彼がマンションの住民に怒られている姿を見た時。

住民の口が動く。

「マイヨ、マイヨ、ギターガウルサインダヨ！」

この時初めて自分の隣人の姿を見た。

明るい茶髪を逆立てた髪型の、細身の青年。

意思の強そうな瞳がとても印象的で、彼を見た瞬間、心がドキリと揺れた。

ギター…。

ああ、あの振動は『音楽』だったんだ。
答えを知り、怒られてふてくされている彼に強い興味を覚えた。

あの人、『音楽』を奏でるんだ。

それから毎夜、私は壁にもたれかかって、彼の『音楽』を感じた。
痺れるような振動が壁伝いに私の心に響く。

目をつぶって想像してみる。

壁を通じて、響く彼の『音楽』。

私の変わらない日常に一つ、幸せな変化が生まれた。

マンションのベランダでタバコを吸う彼。

ベランダの柵を叩く振動が私のベランダの柵に伝わる。

公園のベンチで楽しそうに笑い、歌う彼。

動く彼の口から空気を伝って私の心に歌が染みる。

初めて…歌で心を震わせ、感動した。

こんな感動があつたなんて—。

聞こえなくても胸に届く歌。

まさに天上の奇跡—。

私にとって彼は天使のようだった。

でも—。

彼は私を知らない。

私は彼にとって、歩道脇の街路樹みたいなもの。

気付かず、通りすぎるだけの他人。

それでもいい。

彼は私に知らない世界をくれるから。

だからー。

壁越しに、ほんの少し幸せに幸せになるくらい許してくれるよね？

窓の向こうはどんよりと重いー。

今にも雨が降りだしそう。

冬の冷たい雨が…。

私はそつとカーテンを閉じ、薄暗い空を隠した。

そして壁越しの音に背を預け、ほんの少し切ない幸せを噛みしめる。

それは雨に似ていて…。

切ない音がする。

雨が降りそうで…。

怜司

「よお、久々だな。」

淡々としていて、低くよく通る声。

—怜司だ。

拓海は懐かしい友人の声に体を堅くした。

小森怜司は拓海と同じバンドのベースで、高校からの友人だ。

常に冷静な態度で拓海とは性格も間逆、初めは鼻持ちならないヤツだと拓海は色眼鏡で見ていた。

しかしクールな顔の裏には誰よりも熱い顔があり、二人は気がつくとお互いに一番の理解者になっていた。

だから—。

拓海は誰より怜司に会いたくなかった。

今の情けない自分を見られたら、失望されるかもしれない。見限られるかもしれない—。

去ってしまうなら…自分から去った方がましだ。

意固地になり拒絶してきた。

今では事故当初の激情も収まり、ある程度冷静に物事を見るようになった。

しかし冷静になっただけで、次はあれほど激しく拒絶した相手にどんな顔で会えばいいかわからない。

電話では2、3度話したがぎこちない会話しかできなかった。

だから今……拓海はものすごく居心地が悪かった。

「やっぱり、逃げてたな。」

淡々と怜司が言う。

「そうなのよ、この子都合悪いとすぐ姿隠すの。怜司君来ると連絡もらって見にきて見れば案の定！しかも公園から出てどこに行くうとしてたのか。」

「ほんと……お前、あの公園好きだな。何かあるといつもあそこだ。」

「もっと言っちゃって！」

怜司の言葉に被せるように沙弥香の一際大きな声が部屋に響いた。

——うるせえよ。

拓海は苛立たしげに、声のする方から顔を背け、心の中で舌打ちした。

図星なだけに更に居心地悪い。

久々に怜司に会うのかと思うと変に緊張してしまって、部屋にいられなくなったのだ。

何かから解放されたくて、自由になりたくてあんな行動にでてし

まった。

まさかあんなコトになるなど、拓海も思わなかったが…。

「まあ隣の家の人があんたの居場所教えてくれて、本当よかったわ。」

沙弥香の言葉に拓海は反応する。

「隣人？」

「ええ、そうよ。あんた本当に知らなかったの？あの子は知ってたみたいけど？」

「知らない。」

一人暮らし用の1DKのマンション。

誰も自分のことだけで、他人など気にしない。

拓海もそうだった。

いつもうるさいと苦情を言ってきた男以外、このマンションで顔見知りなどいない。

「隣に住んでるやつなんて…そんなの知らない。見たことない。」

「まあ仕方ないわよね。あんたとは生活リズム違うだろうし。」

拓海の気持ちなど知らず、沙耶香はしたり顔で頷いた。

「知ってるなら知ってるで声かけてくれてもいいだろう。」

拓海は今までの不機嫌さにプラスして複雑な気持ちになった。

「はい。怜司君、お茶。拓海、机の上にあるから。こぼさないでよ。」

「ありがとうございます。」

「分かってるよ。」

ぶすりとする拓海を気にせず、沙弥香は買い物をすると言い残して部屋を出ていった。

ふいに二人きりになり、微妙な空気の中、拓海も怜司も黙り込んだ。

怜司はどんな顔をしているのだろうか。

顔が見えないと不安になる。

怜司の心が分らない。

拓海の心臓が跳ねる。

―ダイジョウブ。

ふいにその言葉が拓海の胸に浮かんた。
何故だろう。

心の漣がその動きを止めた。

心配かけやがって

黙ったままの二人。

先にその沈黙を破ったのは、意外にも冷静な怜司だった。

「おい、拓海…。」

普段ならこらえ性のない拓海の方が先に折れる。
しかし、今日は違った。

「あのな…。」

「怜司、いいよ。」

拓海は怜司の言葉を遮ると、ぎこちない笑顔を声のするほうに向けた。

「色々、心配かけたな。その、なんだ？キレたり、避けたり、ガキみたいなことして、ホント悪かったよ。」

「拓海。」

驚く怜司が息を飲むのが分った。

「あゝこんなの柄じゃねえんだよね。」

拓海は頭を掻き筆るとソファーに身を沈めた。
やっと重荷を下した、そんな開放感がある。

「事故にあつて、視力を失つて、俺怖かつんだ。色々。」

「…。」

「全部なくなつたように思えてさ。全部が憎らしく思えてきた。」

「拓海。」

「でも…。全部憎くても…。失つたものが多くても…。失いたくないものもあるんだな。最近…。んゝ違うか。今、この瞬間までそれに気付かなかつたけど。ほら、馬鹿みたいに突っぱねてたから。」

拓海は自らを振り返り、恥ずかしげに笑つた。

「思春期がよつて話だ。」

怜司は笑わなかつた。

どんな顔をしているのか、拓海は内心不安で仕方なかつた。けど、ここで感情を荒げ、何かしゃべれと喚くほうが全てを後退させる気がしたのだ。

じつと我慢して暗い感情を飲み込む。

それは自分で撒いた種だから。

拒否し続けた結果だから。

だから、どんな答えも全て受け入れなくてはいけない。

「毎日、じじいみたいな生活してんだぜ。面白いもんもないし、やることは公園ぼおつと煙草ふかすぐらい。誰かに世話焼いてもらわないと生きていけないんだからな、ほんつと、なさけねえよ。」

「拓海。」

空気が微かに動いた。

怜司が近寄ってくるのが分る。

拓海の心臓は早鐘を打つ。

拓海の側に怜司が立つ。

拓海は見えない目で不安げに怜司を見上げた。

―ドクンツ。

バシツ！！！

怜司は勢いよく拓海の頭を叩いた。

「！」

「元気じゃねえかよ！！この野郎！！！」

「へっ？」

拓海はポカンと口を開け、訳が分からず怜司の言葉を待った。

「何、感傷的になってんだよ。らしくない。」

「な、何を。」

「電話口で死にかけた声だから、心配してたのに。心配して損した。」

―言ってくれるね。

怜司の、気取らない優しさが胸に染みる。

「怪我人、殴ってんじゃねえよ。」

「黙れ。心配させた罰だ。」

「見舞いに来たんだから、心配しろよ。」

いつもの軽口をたたきながら、拓海は胸ポケットから煙草を出して、慎重に火をつける。

怜司もそれに合わせるように自らの煙草を取り出した。

「あん？見舞い？」

怜司はゆつくりと紫煙をはきながら、眉を寄せた。

「ばっかつ。俺はお前に文句を言いに来たんだよ。」

「何を？」

拓海は怪訝な顔をした。

―思い当たる節がありすぎる。

「いい加減、バンドの活動しろよ。いつまで待たせるつもりだ。」

―バンド…。

拓海の心臓がビクリと凍りつく。

胸の奥が漣を立てる。

暗い瞼に雨が降る。

怜司は拓海の凍りついた表情をじっと見つめた。

バンド

バンド……。

その言葉に、拓海は身を硬くした。

ずっと避けてきた話題を怜司は直球で拓海にぶつけてきた。

拓海の中で、結論は出ていた。

ただ、その結論を現実にする踏ん切りが着かず、言葉にする勇気もなかった。

その結論がバンド仲間である怜司を避けていた一要因でもあった。

拓海は大きく息を吐くと、怜司がいるであろう方向をじっと見据えた。

「俺、バンドを引退する。」

それ以外何も思いつかなかった。

今まで自分の全てをかけてきたバンドとの決別は身を裂くほどに苦しい。

ただ、こうなった今、バンドの一員としてやっていける自信はなかった。

目が見えないことで、バンドのメンバーに迷惑をかけるなんてしたくない。

いや、それ以上に今まで通りにできない自分にこれ以上失望したくなかった。

自分の全てをかけたバンドだからこそ、綺麗な思い出として終わらせたかったのかもしれない。

じつと前を見据えたまま、拓海は怜司の言葉を待った。

「バカやろう…。」

怜司の呟くような声が拓海の鼓膜に大きくこだました。

「怜司、すまない。俺は……。」

「却下だ。」

拓海が謝ろうと口を開いた側から、怜司は拓海の発言を打ち止めた。

「却下、却下！悲観的になって考えついたお前の考えなんて却下だ。俺らのボーカルはお前しかいないんだ。お前がいなくなれば、バンドは解散だ。そこんとこ、よく考えろ。」

「ボーカルならお前がやれよ。お前がボーカルやった曲も何曲があるだろ？お前の低音がいつて評判になった。俺よりお前でやった方が人気が出るよ。だから……」

「それ、本気で言ってるのか？」

怜司の言葉はまるで拓海の内面を全て見定めているようで、拓海は凶星を指されたように黙った。

怜司は小さくため息を吐くと座っていた椅子から立ち上がった。

「また来る。」

そう言つと拓海に背を向けた。

拓海は黙つたまま、見えない自分の足元に視線を漂わせる。

拓海の耳には、怜司の足音が段々と小さくなって聞こえた。

（早く、帰ってくれ。）

そう祈らずにはいられなかった。

その足音がピタリと止まる。

振り向くような衣擦れの音に拓海は身を硬くした。

「お前は、歌わずにはいられないよ。そんなやつだ。バンドなんてやめれない。今まで俺らが築いてきたものは、こんなことじゃなくならない。」

強く言い放たれた怜司の言葉は拓海の胸を貫いた。

しかし、返せる言葉が今の拓海にはなかった。

じゃっ、と言つと怜司は拓海に構わず部屋の外に出た。

がシャン、と意外に軽い音を立てて閉まった玄関ドアに背を預けると、顔をしかめた。

「バカやろう……。俺らの伝説は、こんなことじゃ終わらないだろ？」

その表情はまるで泣き出したいのを我慢する子どものようなだった。

「バカやろ……。」

部屋の中では、悔恨の念にかられたように頭を垂れた拓海が絞り

出すようにそう呟いていた。

「俺だってバンドやりてえんだよ。でもバンドのこと考えたら、こうするのが一番なんだよ。分かれよ、バカやろっ。」

拓海の頭の中では、怜司の言葉が幾重にもこだましていた。

『お前はバンドをやめれない。』

『お前は、歌わずにはいられないよ。』

「俺だって、歌いてえよ……。」

涙まじりの呟きが痛々しく室内に消えていった。

ギター

夜、沙弥香も拓海の夕食を用意して帰った後、拓海は壁際に置かれたギターケースを引き寄せた。

うつすらと埃を被ったそれは、もう何ヶ月も向き合うことを放棄した現実だった。

前のようにこれを弾くことなどできない。

それが拓海の下した結論だったが、答えは日々変化した。

盲目の音楽家と言われる人もいるじゃないか、そう自分に言い聞かせて向き合おうとした時もあった。

しかし、自分がどれほどのものなんだと、自分に前以上に音楽を奏でることができるとか絶望が語りかけ、手に掛けたギターを手放させる。

無理からにケースからギターを引き出した。

流麗なホルムが拓海の手になじりと乗る。

こんなに重かったのかと今更気付くが、それが何になるのだろう。

拓海は滑らかなボディをそっと撫でてみた。

弦に触れなくても聞こえるあの日々のメロディ。

「もう、終わりにしてくれよ。俺はもうこいつを弾けないんだ。弾く資格がない……」

ぐつと唇を噛み、拓海は頭を垂れた。

しんと静まり返った暗い室内にたった一人。

頭の中に響く、慣れ親しんだ音。

瞼に浮かぶメンバー達の顔。

「俺だって忘れたくないんだ。本当は、ずっとお前達とバンドやつ

ていきたいんだよ。まだ一緒に馬鹿やってたいんだ！」

爆発した感情をそのままに、部屋に響く絶叫を上げると拓海はギターに手を掛けた。

思いのままに弦を弾き、ギターをかき鳴らす。

チューニングも出来ていない、うまくネックをつかめない。

拓海は感情をそのまま表したかのような不協和音が時に悲しく、時に激しく部屋を駆け回る。

拓海の無性にギターを弾き続けた。

直接弾いている所為で指先が痛い。

血が滲んでくる。

それでも拓海の感情は止まらない。

全力で弾き続ける。

今まで弾けなかった分を取り戻すように、狂ったように弾き続ける。

どれだけの時間が経ったか。

血に濡れた拓海の手から零れるようにギターが滑り落ちた。

ゴトンッ！

重い音がいやに大きく拓海の耳に届いた。

フローリングに余韻が響く。

暗闇が一気に沈黙する。

痙攣するように震える指先はもう限界で、ギターを拾うこともできない。

自分の手から落ちていったのは果たしてギターだったのだろうか。

「うわあああゝ！！」

拓海は血の滲んだ手で床を叩いた。

やっと一縷の光を感じた瞳に千の雨が降る。

その雨を打ち消すように拓海は床に落ちたギターを掴むと壁に向かって投げ付けた。

―捨てきれない。だからいつそ壊れて消えてくれ！

壁にぶつかったギターが弾かれ、激しい音をたて床に落ちる。衝撃で弦が切れた。

無様な姿になったそれを拓海は拾うことが出来なかった。

いや、拾いたかった。

手に取ればきつと抱きしめて、それにすがり付いてしまう。

相反する感情が拓海を追い込む。

「もう嫌なんだよ！」

拓海は部屋を飛び出た。

暗闇を突き破るように走り出す。

感情のままに叫ぶその声は何よりも悲痛で、壊れたギターが残された暗い部屋に僅かに響いた。

身についたマンションから公園までの道のり。

無意識でも体はいつものベンチに拓海を導く。

夜気に冷やされた冷たい風に混じってぽつりと雫が拓海の頬を叩く。あんなに陽気だった昼下がりからは想像もできない。

いつの間にか曇りだした空から、後から後からぽつりぽつりと雨が続く。

「何で、何で……」

絶望した人の多くがそうする様に、先を失った拓海はその場に膝を

折った。

湿気を含んだ砂の上に手をつく。

その背に無情な雨がその雨足を強く降りかかる。

暗い瞼の裏に雨が降る。

決して止まない、あの日の雨。

消してしまいたいのに、瞳から零れることも脳裏から消えることもしない。

あの日からずっと立ち尽くしたまま。

冬の冷気に包まれ、拓海はあの事故の現場から離れられない。

一滴一滴の雨が徐々にその数を増やし拓海に降り注ぐ。
それは絶望に似た雨。

「もう二度と…俺は……」

零れる嗚咽は雨の音にかき消された。

薄手のシャツに雨が沁みこんで、拓海の体を冷やす。

それでも立つことすらできず、拓海は絶望の淵で震えていた。

じゃり――。

濡れた砂を踏む音にも拓海は気付かなかった。

ただ、降り続ける雨が不意に止んだ。

雨傘

身を叩く絶望の雨が不意になくなり、拓海にも自分の側に誰かがいることを気付いた。

見えない目で縋るようにその相手を探す。

雨に打たれた拓海にそっと傘を差し出したのは、拓海が気になって仕方ない彼の隣人。

彼女は自分が濡れるのも構わず、拓海に傘を向ける。

視線の定まらない彼の目が彼女の方を見つめる。

震える拓海の口が助けを求めるように動いた。

泣きそうな顔でじっと拓海を見つめていた彼女はその瞬間に傘を手放した。

ぱしゃつと音を立て、傘が水溜りに落ちる。

彼女は雨に濡れるのも、ぬかるみで汚れるのも構わず拓海に抱きついた。

まるで彼を雨から守るように細い体で、自分よりも大きな拓海を包み込む。

彼女の愛らしい瞳から止めどなく涙が零れ、拓海的首筋に落ちる。冷たい雨に混じった温かな雫。

不意に与えられたそれに無性に胸を締め付けられ、拓海は縋るように彼女にしがみついた。

抱きしめる、なんて言えない。

ただ自分の激情を彼女にぶつけるように拓海は叫び声を上げながら、彼女を締め付ける。

春でも雨は冷たい。

その一滴でも思わずびくりと肩を震わせるのに、それが千に、万に、

それ以上になった時の冷たさといったら。

心まで冷え切り、動き出そうとする熱意を奪う。

拓海の体を、そして拓海を意抱きしめる彼女を春雨が容赦なく降り注ぐ。

それでも抱きしめあつた部分だけはいやに熱くて、無意識に温かさを求め、もっと彼女をきつく抱きしめる。

冷え切った体に熱が沁みこんでくるように、頑なに閉ざされた心が徐々にほころび始める。

「俺は、捨てたくないんだ。仲間に失望されるのが怖くて、続けることができないって思いたいんだ。でも、俺からギターを取ったら何も残らない。何もない自分がちっぽけで、でも前みたいに弾けない自分が哀れで、もうどうしていいか分からないんだ。でも……」

口が勝手に動く。

相手は何の相槌も打たないが、拓海は構わずにしゃべり続けた。

誰かに心の奥底で淀んだ自分の劣情を知ってほしかった。

プライドが高く、誰にも言えなかった自分の本音を聞いてほしかった。

もうずっと限界だったのだ。

「でもやりたいんだ。前みたいに、皆で楽しく。あの日々の続きがしたいんだ。俺は……」

全てぶちまけて、ぷつりと声が途切れる。

我に返ったように自分を抱きしめる彼女から体を離すと拓海は小さく呟いた。

「俺は歌、歌いたい。どんなになっても……」

ゆっくりと顔を上げ、目の前にいる彼女を見つめようとする。暗闇を見つめたままの拓海。

しかし、自分の視線が目の前の彼女を捉えている気がした。間違いない、そう予感する。

そつと目の前にいるであろう彼女に手を差し伸べる。

濡れた指先が柔らかな肌に触れる。

ゆっくりとその存在を確かめるように指を這わす。

彼女を傷つけないようにそつと優しく。

彼女は拓海の手を払いのけることはせず、じつとそのまま、拓海 of されるがまだ。

拓海の指先は顔から首、そして腕へと落ちていく。

柔らかな感触に荒んだ心が別の動悸を訴える。

それをごまかすようにぱつと手を引くと、拓海はそっぽを向いた。気まずい時の癖。

見えなくなっても何かごまかすものを探して視線を漂わす。

しかし離れた手を不意に握られて、拓海はびくりとした。

情けない顔で様子を窺がうように彼女に向き直る。

優しく拓海の手を取った彼女はそのまま自分の頬に拓海の手を当てた。

― あったかい。

じんわりと心に灯ったのは、なんと言う名の炎だろう。

未だに雨は二人を包み込むように降り注ぐ。

身を打つ雨は冷たい。

冷え切った体は小刻みに震える。

ただ、重なった部分だけは温かかくて。

いつまでも触れていたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4670f/>

レイニーブルー

2010年11月30日03時11分発行